

理事長所信



2020年度（第六年度）

一般社団法人 北名古屋青年会議所



第六代 理事長

櫻井 謙 至

昭和57年6月17日生

【経歴】(法人格省略)

2017年度	北名古屋青年会議所		[入 会]
	北名古屋青年会議所	愛市精神溢れるまちづくり委員会	[委 員]
2018年度	北名古屋青年会議所		[理 事]
	北名古屋青年会議所		[事務局長]
2019年度	北名古屋青年会議所		[理 事]
	北名古屋青年会議所	みんなのふるさと創造委員会	[委員長]
	愛知ブロック協議会		[出 向]
	愛知ブロック協議会	次世代教育選択委員会	[会計幹事]

理事長所信

一般社団法人 北名古屋青年会議所
第六代理事長 櫻井 謙至

報恩感謝

～すべてに感謝し、まことをもって報いる～

【はじめに】

人は亡くなると、亡骸は棺に納められる。今でこそ寝たままの姿で納める寝棺しかもう目にすることはないが、昔は、座った姿勢で納める座棺だった。

桶の形の棺なので、棺桶といわれた。

土葬するにしても、焼き場まで運ぶにしても、座棺よりも寝棺の方が都合が良いのに、なぜ座棺だったのか？

それは、私たちのご先祖様たちが、田畑に這いつくばって、背骨が曲がって元に戻らなくなるまで、大変な農作業をし続けたからだ。亡くなると体が「く」の字に曲がってしまい、寝棺では、蓋が閉められないのだ。だから、座る姿勢で埋葬するしかなかった。

そうやって、何世代にも亘り、私たちにつながる命を、食べさせてくれた。

感謝しかない。

また、先の大戦での敗戦から4年。未だ混乱収まらない中、明るい豊かな社会の実現を理想とし、「新しい日本の再建は我々青年の仕事である」という覚悟のもと、青年会議所運動を始め、GHQの戦後政策によって弱体化するしかないと思われた日本を、そして、失われかけた全うな日本人の心を、私たちの内側からしっかりと支えてくれた。

戦場に散った先人たちは、命を賭して未来を私たちに託してくれた。一方、生き抜いてくれた先人たちは、不断の努力により、復興と繁栄をもたらしてくれた。

感謝しかない。

6年前、この北名古屋の地に、青年会議所運動の火が灯された。

今、プレジデンシャルリースの重さを感じている。連綿とつながる次世代に対

するその想いが詰まっているのが肌で分かる。その想いが、このリースを通して胸に入ってくる。

しっかりと受け継ぎ、未来へ渡さなければならない。

では今、この時代を生きる私たちが目指すべき、明るい豊かな社会とは何か。

この北名古屋市において、私は、

1. 地元を誇れるまち
2. 自然豊かで子どもの笑顔があふれるまち
3. 安心・安全に暮らせるまち

の3つに重点を置きたいと考える。

【地元を誇れるまち】

私と北名古屋市とのご縁は、西春高校に通ったところからはじまる。当時はまだ、師勝町と西春町だった。

その師勝町は5つの村から、西春町は3つの村から成立している。

「むら」とは、自然に集まる様子で、それを表す動詞が「むらがる」。つまり村とは、自然の営みの一環として家が密に集まっている様子を指す。

そして、町になった。「まち」とは、「区切られた一区画」のこと。本来は区切りを持たないものを区切ることで、機能的あるいは平等な状況が作り出される「まち」は、とても合理的な区画である。

さらに、市になった。「いち」だ。合理的な区画がさらに発展し、人や物の交流の場となった。「いちば」だ。市場は、商業が盛んであり、人・物・金・情報が集まる場所である。

北名古屋市の誕生から14年となる今日においても、私は、完全に「市」になれたとはいえないと思っている。なぜなら、生活都市としての魅力により人口が増加したものの、その消費活動は、市外であることがほとんどであるからだ。

これまでの政策にもあるように、企業誘致などにより、工業面においては目標を達成したといえるかもしれないが、商業面、特に市民の消費活動・購買意欲・投資意欲が高まるようなものが少なく、弱いと感じてしまう。市内でお金を落としてもらえるようになるということは、市を愛し誇りに思う心が育まれることにつながるため、青年会議所としても、その方法を探求・実践していきたいと思う。

【自然豊かで子どもの笑顔があふれるまち】

北名古屋市では農地が約2割を占め、水辺や田園風景も残っているが、第1次産業の就業者数は1%余りである。商工業に重きが傾いていくのは、自然な成り

行きでもある。市外から転入した人たちは、北名古屋市に田畑を持っていない。そこに、市民の生活と自然環境とに乖離が生じ、拡がってしまっている。農業と商工業は、両存できないのか。

否。これまで日本を訪れた多くの外国人が、日本の田園と農業を称賛している。私たちには当たり前風景だった水田や稲穂自体が、昔から観光資源になり得るものなのだ。

さらに稲作は、そこに住む者のアイデンティティにも深く関係している。農業は機械化が進んでいるとはいえ、稲作を通じて生まれた「和」を大切にす地域コミュニティの発展や、人付き合いや助け合いといった、「行き過ぎた個」によって失われかけているものを育むことができる。個人主義と利己主義を、履き違えてはならない。

「世の為、人の為に真心を盡す」という日本人の精神性は、稲作を通じて育まれてきた。春の祈年祭で五穀豊穡を祈る。しかし、天災などでたとえ収穫がほとんどできなかったとしても、「せっかく祈ったのに。もう神様なんて信じない。」ではなく、「こんなに酷い年だったのに、これだけでも採れました。ありがとうございます。」というように、どうしようもないことをも真摯に受けとめ、前に進む強い心をも培ってきたのだ。

青年会議所として、稲作を通じ、お米と、目に見えない大切なものを育てる取り組みを続けていきたいと思う。そして、これらを通じて、全うな日本人の心を育んだ笑顔あふれる子どもたちが、将来、この国やまちのために真心を盡してくれたら、これほど嬉しいことはない。

【安心・安全に暮らせるまち】

『天地の 神にぞいのる 朝なぎの 海のごとくに 波たたぬ世を』

巫女舞である「浦安の舞」で歌われている。昭和天皇がお詠みになられた。

この歌が詠まれた昭和8年当時の背景としては、開戦が迫ってきていたので、平穏を願われたのであるが、この歌は、今の時代においても、私たちの平穏を願ってくれている。

近年、地震や台風などの自然災害による罹災・被災の規模が大きくなっている。それはおそらく、建設技術などが発達し、インフラがより整い、国土が強靱になったことで、罹災・被災を経験する回数も減り、インフラに対する過度な信頼も相俟って、ある程度は大丈夫であろうという心のゆるみと、気候変動により想定以上の災害が増えたからであろう。

まちに「住む」の語源は、心が「澄む」の「すむ」。心が安定し、澄んだ状態になることだ。災害に負けない生活都市となり、北名古屋市に住むことが安らぎとなり、心が澄んで、普段の生活においても、たとえ悲しいとき、疲れたときも、毎日元気に朝を向かえ、仕事に、勉強に精を出すことができる生活都市である

よう、青年会議所としても協力していきたいと思う。

【豊かさ】

『空蟬の 唐織衣 何かせむ 綾も錦も 君ありてこそ』

徳川第13代将軍家茂が、長州討伐に出立する際、正室の和宮親子内親王に京土産を買って帰ることを約束したが、そのまま病に倒れ、帰らぬ人となった。そして後日、京都の美しい織物などが和宮様のもとに送られてきた時に、お詠みになられた歌である。政略結婚が主であった時代に、これほど仲の良い夫婦はめずらしいと評されている。

忙しさがピークになると、家庭を蔑にしがちになってしまうことも多いと思う。まさに、その文字が表すとおり、心を亡くした状態である。家庭は社会の最小単位であるから、家庭を蔑にするということは、社会を蔑にしているのと同じであるといえる。

私は思う。新時代の明るい豊かな社会を実現するために最も重要なことは、生活(なりわい)の心安(うらやす)であると。これが「豊かさ」に繋がると考える。まったくもって、言うは易く行うは難し、であるが、私たちは、先人・先輩方に倣ってその豊かさを実現して参りたい。

そして、その豊かさを手に入れる手段がここにはあるということ、一人でも多くの青年に知ってもらい、品位をもって拡げて参りたい。

組織の拡充と会員の増強こそ、明るい豊かな社会の実現への近道なのである。

また何より、会員一人ひとりが、「君ありてこそ」である。何にも代え難い大切な存在なのだ。誰一人欠けてはならない。欠けてしまったら社会の損失甚だしいということを再認識し、自愛してほしいと思う。ここには友がいて、支えてくれる。一緒に成長して参りたい。

【むすびに】

たしかに近現代は、物上至上主義と拝金主義が蔓延していた。しかし、大量生産・大量消費の時代は終わり、新たな時代へと移っている。時代は螺旋階段上にスパイラルアップしてゆき、歴史は繰り返すといわれているが、私たち日本人は、すでに目に見えないものを大切にす価値観を有しているではないか。

世界の民族研究から歴史学者アーノルド・ジョゼフ・トインビーが挙げた

- I. 自国の歴史を忘れた民族は滅びる
- II. すべての価値を物やお金に置き換え心の価値を見失った民族は滅びる
- III. 理想を失った民族は滅びる

という、滅亡する民族の3つの共通点が、多くの著名人から紹介され、あまりにも有名になった。今の日本がこれに当てはまるとして、危惧されている。

しかし私は絶望していない。日本は滅びない。青年会議所という若き団結（ちから）があり、新しき世紀（よ）の希望（のぞみ）となり、祖国（くに）の進歩（あゆみ）の力となっているからだ。

青年会議所の会員、つまりJAYCEEは、公人である、とよくいわれる。「公（おおやけ）」とは、もともと、大きいお宅と書く「大宅（おおやけ）」、つまり大きな家のこと。この言葉は、私たちの心を大いに刺激してくれる。それは、日本国民全体が1つの大きな家に住んでいる、さらには、世界中の人々が1つの大きな家で暮らしている、というイメージを持てるからだ。このイメージを持って、私たちは、より真剣に、そして他者への思いやりを忘れずに、大きな家を代表する者の1人として、議論や思索、活動・運動を展開したい。